

1

(1)

$f(x)$ を x について微分すると,

$$\begin{aligned} f'(x) &= 3x^2 - 18x + 24 \\ &= 3(x-2)(x-4) \end{aligned}$$

となるから, $y=f(x)$ の増減表は以下のようになる。

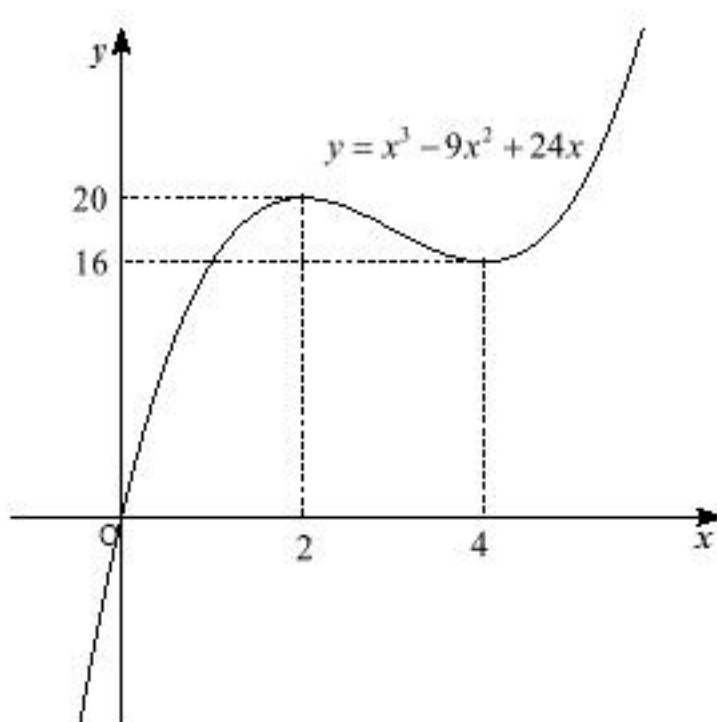
x	...	2	...	4	...
$f'(x)$	+	0	-	0	+
$f(x)$	↗	$f(2)$	↘	$f(4)$	↗

増減表より, $y=f(x)$ は,

$$x=2 \text{ のとき, 極大値 } f(2)=20$$

$$x=4 \text{ のとき, 極小値 } f(4)=16$$

を取る。従って, $y=f(x)$ のグラフの概形は以下のようになる。



(答) 前表および前図

(2)

$$f(x) = kx$$

$$\Leftrightarrow x^3 - 9x^2 + (24-k)x = 0$$

$$\Leftrightarrow x\{x^2 - 9x + (24-k)\} = 0$$

$$\therefore x=0, x^2 - 9x + (24-k) = 0$$

であるから, 方程式 $x^2 - 9x + (24-k) = 0$ の解の個数について考える。 $x^2 - 9x + (24-k) = 0$ の判別式を D とすると,

$$\begin{aligned} D &= 81 - 4(24-k) \\ &= 4k - 15 \end{aligned}$$

であるから, D の正負により場合分けをして考える。

[1] $D < 0$ つまり $k < \frac{15}{4}$ のとき

このとき, 2次方程式 $x^2 - 9x + (24-k) = 0$ は実数解を持たない。従って, 曲線 $y=f(x)$ と直線 $y=kx$ の共有点は1個である。

[2] $D = 0$ つまり $k = \frac{15}{4}$ のとき

このとき, 2次方程式 $x^2 - 9x + \frac{81}{4} = 0$ は重解 $x = \frac{9}{2}$ を持つ。従って, 曲線 $y=f(x)$ と直線 $y=kx$ の共有点の個数は2個である。

[3] $D > 0$ つまり $k > \frac{15}{4}$ のとき

このとき, 2次方程式 $x^2 - 9x + (24-k) = 0$ は異なる2つの実数解を持つ。ここで, $x^2 - 9x + (24-k) = 0$ が $x=0$ を解に持つのは,

$$24 - k = 0$$

$$\therefore k = 24$$

の場合のみである。従って, 曲線 $y=f(x)$ と直線 $y=kx$ の共有点の個数は, $k=24$ のとき

2個, $\frac{15}{4} < k < 24, 24 < k$ のとき3個である。

以上, [1], [2], [3]より, 曲線 $y=f(x)$ と直線 $y=kx$ の共有点の個数は,

$$k < \frac{15}{4} \text{ のとき, 1個}$$

$$k = \frac{15}{4}, 24 \text{ のとき, 2個}$$

$$\frac{15}{4} < k < 24, 24 < k \text{ のとき, 3個}$$

である。

(答) $k < \frac{15}{4}$ のとき1個, $k = \frac{15}{4}, 24$ のとき2個, $\frac{15}{4} < k < 24, 24 < k$ のとき3個

(3)

$$x^3 - 9x^2 + 24x = 6x$$

$$\Leftrightarrow x^3 - 9x^2 + 18x = 0$$

$$\Leftrightarrow x(x-3)(x-6) = 0$$

$$\therefore x = 0, 3, 6$$

である。 $0 < x < 3$ のとき $f(x) > kx$ であり, $3 < x < 6$ のとき $f(x) < kx$ であるから,

$$\begin{aligned} S &= \int_0^3 (x^3 - 9x^2 + 18x) dx + \int_3^6 (-x^3 + 9x^2 - 18x) dx \\ &= \left[\frac{1}{4}x^4 - 3x^3 + 9x^2 \right]_0^3 - \left[\frac{1}{4}x^4 - 3x^3 + 9x^2 \right]_3^6 \\ &= \frac{81}{2} \end{aligned}$$

である。

(答) $S = \frac{81}{2}$

(1)

 $\triangle ABC$ の面積 S_1 は

$$\begin{aligned}
 S_1 &= \frac{1}{2} \sqrt{|\overline{AB}|^2 |\overline{AC}|^2 - (\overline{AB} \cdot \overline{AC})^2} \\
 &= \frac{1}{2} \sqrt{|\vec{b}|^2 |\vec{c}|^2 - (\vec{b} \cdot \vec{c})^2} \\
 &= \frac{1}{2} \sqrt{1 \cdot 3 - 1^2} \\
 &= \frac{\sqrt{2}}{2}
 \end{aligned}$$

と求められる。

(答) $S_1 = \frac{\sqrt{2}}{2}$

(2)

点 D は辺 BC を 1:2 に内分することから、 \overline{AD} は

$$\overline{AD} = \frac{2}{3} \vec{b} + \frac{1}{3} \vec{c}$$

と表せる。ここで、 \overline{AE} を実数 s, t を用いて

$$\overline{AE} = s \vec{b} + t \vec{c}$$

と表すと、線分 AD に関して点 E が点 B と対称であるから、 $AD \perp BE$ より

$$\begin{aligned}
 \overline{AD} \cdot \overline{BE} &= 0 \\
 \Leftrightarrow \overline{AD} \cdot (\overline{AE} - \overline{AB}) &= 0 \\
 \Leftrightarrow \left(\frac{2}{3} \vec{b} + \frac{1}{3} \vec{c} \right) \cdot \left((s-1) \vec{b} + t \vec{c} \right) &= 0 \\
 \Leftrightarrow \frac{2s-2}{3} |\vec{b}|^2 + \frac{s+2t-1}{3} \vec{b} \cdot \vec{c} + \frac{t}{3} |\vec{c}|^2 &= 0 \\
 \Leftrightarrow \frac{2s-2}{3} + \frac{s+2t-1}{3} + t &= 0 \\
 \Leftrightarrow s + \frac{5}{3} t - 1 &= 0 \\
 \Leftrightarrow s = -\frac{5}{3} t + 1 &\quad \dots \textcircled{1}
 \end{aligned}$$

が成り立つ。また、線分 AB と線分 AE の長さが等しいことから

$$\begin{aligned}
 |\overline{AB}|^2 &= |\overline{AE}|^2 \\
 \Leftrightarrow |\vec{b}|^2 &= |s \vec{b} + t \vec{c}|^2 \\
 \Leftrightarrow 1 &= s^2 |\vec{b}|^2 + 2st \vec{b} \cdot \vec{c} + t^2 |\vec{c}|^2 \\
 \Leftrightarrow 1 &= s^2 + 2st + 3t^2
 \end{aligned}$$

が成り立つので、これに①を代入して、

$$\begin{aligned}
 1 &= s^2 + 2st + 3t^2 \\
 \Leftrightarrow 1 &= \left(-\frac{5}{3} t + 1 \right)^2 + 2 \left(-\frac{5}{3} t + 1 \right) t + 3t^2 \\
 \Leftrightarrow \frac{22}{9} t^2 - \frac{4}{3} t &= 0 \\
 \Leftrightarrow \frac{22}{9} t \left(t - \frac{6}{11} \right) &= 0 \\
 \Leftrightarrow t &= 0, \frac{6}{11}
 \end{aligned}$$

となる。 $t=0$ のとき、①より $s=1$ となるが、このとき点 E が点 B と一致するため不適である。したがって $t = \frac{6}{11}$ であり、このとき①より $s = \frac{1}{11}$ であるから、 \overline{AE} は

$$\overline{AE} = \frac{1}{11} \vec{b} + \frac{6}{11} \vec{c}$$

と表せる。

(答) $\overline{AE} = \frac{1}{11} \vec{b} + \frac{6}{11} \vec{c}$

(3)

 $\overline{AF} = k \overline{AE}$ ($k > 0$) とおくと、

$$\begin{aligned}
 \overline{AF} &= k \overline{AE} \\
 &= \frac{1}{11} k \vec{b} + \frac{6}{11} k \vec{c}
 \end{aligned}$$

となる。点 F は辺 BC 上の点であることから

$$\begin{aligned}
 \frac{1}{11} k + \frac{6}{11} k &= 1 \\
 \Leftrightarrow k &= \frac{11}{7}
 \end{aligned}$$

であるので、 \overline{AF} は

$$\begin{aligned}
 \overline{AF} &= \frac{1}{11} k \vec{b} + \frac{6}{11} k \vec{c} \\
 &= \frac{1}{7} \vec{b} + \frac{6}{7} \vec{c}
 \end{aligned}$$

と表せる。

(答) $\overline{AF} = \frac{1}{7} \vec{b} + \frac{6}{7} \vec{c}$

(4)

(3)の結果より、点 F は辺 BC を 6:1 に内分する点であるから、

$$BF = \frac{6}{7} BC$$

である。また、点 D は辺 BC を 1:2 に内分する点であるから、

$$BD = \frac{1}{3} BC$$

である。したがって、

$$\begin{aligned}
 DF &= BF - BD \\
 &= \frac{6}{7} BC - \frac{1}{3} BC \\
 &= \frac{11}{21} BC
 \end{aligned}$$

より、

$$DF : BC = 11 : 21$$

である。

(答) $DF : BC = 11 : 21$

(5)

(3)の結果より、 $\overline{AF} = \frac{11}{7} \overline{AE}$ であるから、

$$EF : AF = 4 : 11$$

である。したがって、 $\triangle ADF$ の面積を S_3 とすると、 $\triangle DEF$ の面積 S_2 は

$$S_2 = \frac{4}{11} S_3$$

と表せる。また(4)の結果より、 S_3 は $\triangle ABC$ の面積 S_1 を用いて

$$S_3 = \frac{11}{21} S_1$$

と表せる。よって、 S_2 の値は

$$\begin{aligned}
 S_2 &= \frac{4}{11} S_3 \\
 &= \frac{4}{11} \cdot \frac{11}{21} S_1 \\
 &= \frac{4}{21} S_1 \\
 &= \frac{2\sqrt{2}}{21}
 \end{aligned}$$

である。

(答) $S_2 = \frac{2\sqrt{2}}{21}$

(1)

t の範囲は、 $0 \leq t \leq 2$ であるから、 $1 \leq e^t \leq e^2$ であるので、 $0 \leq x \leq 1$ の場合と $1 \leq x \leq e$ の場合で場合分けする。

[1] $0 \leq x \leq 1$ のとき

$0 \leq t \leq 2$ の範囲で、

$$e^t - x^2 \geq 0$$

であるから、

$$\begin{aligned} f(x) &= \int_0^2 (e^t - x^2) dt \\ &= [e^t - x^2 t]_0^2 \\ &= -2x^2 + e^2 - 1 \end{aligned}$$

である。

[2] $1 \leq x \leq e$ のとき

$0 \leq t \leq 2 \log x$ のとき

$$e^t - x^2 \leq 0$$

であり、 $2 \log x \leq t \leq 2$ のとき

$$e^t - x^2 \geq 0$$

であるから、

$$\begin{aligned} f(x) &= -\int_0^{2 \log x} (e^t - x^2) dt + \int_{2 \log x}^2 (e^t - x^2) dt \\ &= -[e^t - x^2 t]_0^{2 \log x} + [e^t - x^2 t]_{2 \log x}^2 \\ &= 4x^2 \log x - 4x^2 + e^2 + 1 \end{aligned}$$

となる。

以上[1],[2]から答えは、 $0 \leq x \leq 1$ のとき $f(x) = -2x^2 + e^2 - 1$ 、 $1 \leq x \leq e$ のとき $f(x) = 4x^2 \log x - 4x^2 + e^2 + 1$ である。

$$(\text{答}) \quad f(x) = \begin{cases} -2x^2 + e^2 - 1 & (0 \leq x \leq 1) \\ 4x^2 \log x - 4x^2 + e^2 + 1 & (1 \leq x \leq e) \end{cases}$$

(2)

$0 \leq x \leq 1$ において、 $f(x) = -2x^2 + e^2 - 1$ より、

$$f'(x) = -4x$$

であるので、 $0 \leq x \leq 1$ で $f(x)$ は単調減少する。また、 $1 \leq x \leq e$ において、

$f(x) = 4x^2 \log x - 4x^2 + e^2 + 1$ であるから、

$$\begin{aligned} f'(x) &= 8x \log x + 4x^2 \cdot \frac{1}{x} - 8x \\ &= 8x \log x - 4x \\ &= 4x(2 \log x - 1) \end{aligned}$$

である。このとき、

$$2 \log x - 1 = 0 \Leftrightarrow x = \sqrt{e} \quad (\because 1 \leq x \leq e)$$

となるので、全体の増減表は下のようになる。

x	0	...	1	...	\sqrt{e}	...	e
$f'(x)$	0	-	-	-	0	+	+
$f(x)$	$e^2 - 1$	\searrow	$e^2 - 3$	\searrow	$e^2 - 2e + 1$	\nearrow	$e^2 + 1$

増減表より、 $x = e$ のとき $f(x)$ は最大値 $e^2 + 1$ 、 $x = \sqrt{e}$ のとき $f(x)$ は最小値 $e^2 - 2e + 1$ となる。

(答) $x = e$ のとき $f(x)$ は最大値 $e^2 + 1$ 、 $x = \sqrt{e}$ のとき $f(x)$ は最小値 $e^2 - 2e + 1$

(1)

$$\begin{aligned} z_2 &= z_1 w^3 \\ &= w^4 \\ &= r^4 \left(\cos \frac{\pi}{24} + i \sin \frac{\pi}{24} \right)^4 \end{aligned}$$

と変形できる。したがって、ド・モアブルの定理より、

$$\begin{aligned} z_2 &= r^4 \left(\cos \frac{\pi}{6} + i \sin \frac{\pi}{6} \right) \\ &= r^4 \left(\frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{i}{2} \right) \end{aligned}$$

となる。

$$(\text{答}) \quad z_2 = r^4 \left(\frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{i}{2} \right)$$

(2)

$n \geq 2$ に対して、

$$\begin{aligned} z_n &= z_{n-1} w^{n+1} \\ &= z_{n-2} w^n w^{n+1} \\ &= \dots \\ &= z_1 w^3 w^4 \dots w^n w^{n+1} \\ &= w^{1+3+4+\dots+n+(n+1)} \\ &= w^{1+2+3+4+\dots+n+(n+1)-2} \\ &= w^{\frac{(n+1)(n+2)}{2}-2} \\ &= w^{\frac{n^2+3n-2}{2}} \\ &= r^{\frac{n^2+3n-2}{2}} \left(\cos \frac{n^2+3n-2}{48} \pi + i \sin \frac{n^2+3n-2}{48} \pi \right) \end{aligned}$$

と変形でき、 $n=1$ のときにも上式は成り立つ。したがって、 z_n の偏角の1つは $\frac{n^2+3n-2}{48} \pi$ となる。

$$(\text{答}) \quad \frac{n^2+3n-2}{48} \pi$$

(3)

$\angle O$ は z_n, z_{n+1} の偏角の差であり、与えられた条件より $\angle O = \frac{\pi}{3}$ であることから、 m を整数と

して

$$\begin{aligned} \frac{(n+1)^2+3(n+1)-2}{48} \pi - \frac{n^2+3n-2}{48} \pi &= \pm \frac{\pi}{3} + 2m\pi \\ \Leftrightarrow \frac{2n+4}{48} \pi &= \pm \frac{\pi}{3} + 2m\pi \\ \Leftrightarrow n &= 6+48m, -10+48m \end{aligned}$$

のいずれかが成り立つ。いま、与えられた条件 $7 \leq n \leq 48$ より、 $n = -10+48m$ で $m=1$ のときのみ条件を満たし、 $n=38$ となる。このとき、

$$\begin{aligned} z_{38} &= r^{778} \left(\cos \frac{778}{24} \pi + i \sin \frac{778}{24} \pi \right) \\ &= r^{778} \left(\cos \frac{5}{12} \pi + i \sin \frac{5}{12} \pi \right) \\ z_{39} &= r^{818} \left(\cos \frac{818}{24} \pi + i \sin \frac{818}{24} \pi \right) \\ &= r^{818} \left(\cos \frac{\pi}{12} + i \sin \frac{\pi}{12} \right) \end{aligned}$$

となり、 z_n の偏角 θ は $\theta = \frac{5}{12} \pi$ となる。いま、 $\triangle P_n O P_{n+1}$ は $\angle O = \frac{\pi}{3}$ を満たす直角三角形であり、

与えられた条件 $r > 1$ より $OP_n < OP_{n+1}$ であることに注意すると、 $\angle OP_n P_{n+1} = \frac{\pi}{2}$ であることが

わかり、

$$\begin{aligned} OP_n : OP_{n+1} &= 1 : 2 \\ \Leftrightarrow r^{778} : r^{818} &= 1 : 2 \\ \Leftrightarrow 2r^{778} &= r^{818} \\ \therefore r &= 2^{\frac{1}{40}} \end{aligned}$$

となる。

$$(\text{答}) \quad n=38, r=2^{\frac{1}{40}}, \theta=\frac{5}{12} \pi$$